

REAL MARKETING METHOD

- 1 -

商品価値を高める！ パッケージ戦略② グラビア印刷と何が違う？ 小ロット印刷、製造の現場を追う

パッケージは商品の顔。特に小売り店頭で瞬間的に消費者の心をつかむには、パッケージの工夫が欠かせません。しかし商品の中身、質には日夜努力を重ねながらも、それを包むパッケージについては製造コストの一つとして捉え、有効活用できていないケースも多いようです。連載では3回にわたり、企業への信頼を高め、商品の売上を高める、価値を生み出すパッケージ戦略を解説していきます。

工場に潜入！



「エスプリ」の見目は、大きなサイズのプリンタといった感じ。PCから送られたデザインデータを受信し、フィルムに印刷される。グラビア印刷は、色の調合など印刷を始めるまでに時間がかかり、印刷自体の時間は短い。一方で「エスプリ」は事前の準備には時間がかからないが、実印刷の工程が従来のグラビアよりも時間を要する。



「エスプリ」の構造を説明するエスプリ印刷課 課長の小柳氏。単なる小ロット印刷ではなく、パッケージ印刷であることから、印刷する素材の難しさはもちろん、さらに整形・加工と熱が加わるプロセスなどもあり、それだけにハードルも多かった。プロジェクトは、もともとグラビア印刷のオペレーターだった小柳氏が突如、デジタル印刷を任されてスタートしたが、営業、デザイン、ラミネート、製袋を巻き込んだ全社的なプロジェクトとして進められてきた。マニュアルは全て英語という環境の中、フィルム印刷から袋の成型までを軌道に乗せた。スタート時は「インディゴ」は1台しか稼働しておらず、たびたび機械トラブルも起こり、受注しながら対応できない…。そんな苦難を経験して今に至る。



現在、静岡の工場稼働する「エスプリ」は合計4台。億単位の投資が必要な新事業でありながら、従来のグラビア印刷よりも高い単価のため、営業の現場も当初は苦戦。「最初にグラビア印刷と比べての『エスプリ』のデメリットをお伝えした上でメリットを伝えることが、真に『エスプリ』を有効に活用いただけるシチュエーションの理解につながっていった」という。

消費者の嗜好性が多様化し、細かいターゲットや使用シチュエーションに合わせた商品展開が必要とされる時代。一方で、緻密なターゲット戦略に基づく商品企画は多くの企業の負担になっている。「極力、コストをかせずに少量多品種の商品展開の可能性を試したい」あるいは、ヒット商品が生まれづらい時代だけに「もっと手軽に新商品のテストマーケティングを行いたい」。そ

んなニーズを抱える企業は多いだろう。1932年に創業し、茶袋の製造販売から事業をスタートさせたパッケージ資材の印刷・製造を手掛ける吉村では、そんなニーズに着目し2008年からオンデマンドデジタルパッケージ印刷の事業をスタートさせた。同社では、ヒューレット・パカード社の版不要のデジタル印刷機「インディゴ」を導入。それまで軟包装の成功事例がな

色ブレの説明をする植田氏。



グラビア印刷に比べると、「エスプリ」は色ぶれが発生しやすく、特色が使用できないなど、制約もある。これまでグラビア印刷でお付き合いのあった企業に対して、「エスプリ」を提案しているため、実物を見せて、どの程度の色ぶれが発生するのかを事前に見せ、納得してもらっている。また、これまで「エスプリ」で印刷したパッケージは全て見本として、工場内に保管している。

印刷終了後、裁断、袋状に成型する前のチェック工程。複数回のチェックで不良品を取り除いていく。ワンストップの一貫生産だからこそ、商業ベースの実績を積み上げてきた。



エスプリについて詳しくはコチラ



食品メーカーのパッケージ印刷を手掛けるケースが多いことから、2013年6月より「エスプリ」工場はクリーンルーム化を実現。異物混入を防ぐため、ボールペンはキャップのついていないもの、カッターも刃の折れないものなど、工場内に持ち込める私物にも厳密な制限がある。



ターゲット別、少量多品種の展開他、季節別、ご当地別など小ロット印刷だからできるパッケージ展開のアイデアは広がる。写真はメッセージカードとして使えるお茶のパッケージ。ポストカード感覚で選ぶ楽しみが演出できるのも、小ロット印刷ならではの。さらに2014年からは企業のノベルティや個人のプレゼント需要に応える、300枚からのパッケージ印刷を受け付けるサービス「マイバケ」もスタート。コミュニケーションツールとしてのパッケージの可能性は広がっている。

かった「インディゴ」を使って、初めてのフィルム印刷の商業化に成功。同社では、このデジタル印刷機を「エスプリ」と名付け、従来のグラビア印刷に加え、新たな事業を立ち上げた。「グラビア印刷の場合、当社の最小ロットは2000メートルですが、『エスプリ』なら1アイテム500メートルから対応可能。しかも、同じサイズ・仕様のパッケージであれば、デザイン

違いを複数パターン同時に作ることで総費用が大幅に削減されます。グラビア印刷では必須の、一色につき一版発生する製版費用がかからず、版の経年変化による腐食の心配もありません。どこの印刷会社でも一定期間が過ぎると、お預かりしていた版を処分してしまいましたが、版落ちも気にする必要がありません。（静岡総合工場 品質部長 植田勝利氏）。

製版代がかからない。小ロット多品種で、新商品のテストマーケティングに在庫リスクを持たずに挑戦することができます。今回は、そんなパッケージを重要なマーケティングツールにしていると考え、静岡県・焼津市にある吉村の静岡総合工場を訪問。上に紹介する一連の写真は、同工場内で撮影したものの。写真を中心に、オンデマンドデジタルパッケージ印刷の特徴を解説する。